

～今月の読み物～

「落語と私」

三代目 橘ノ百圓

明けまして、お目出とうございます。昨年6月29日、第一回新木場寄席では、大変お世話になりました。この場を借りまして、改めてお礼を申し上げます。この会を企画してくれました、渡辺理事長はじめ、青年部の皆様、事務局の方々、そしてご来場頂きました、お客様に深く感謝を致します。何しろ、第一回と言う事で、青年部の皆様には全てが初めてだったので、何から進めて良いやら…!?テな感じでした。先ずは、お客様の座る位置、高座の設定場所と高さ、出囃子等の音響、一からの出発でした。私の要求に満点以上の応えを出してくれまして、シッカリとした高座、これは保管の都合上、組立式とし、その場に上る梯子段も、またメクリ台も、実に素晴らしい物が出来上りまして、私が驚いております。そして前日に、全ての準備と下^{まら}濑い。当日は、係の皆さんで早くからの打合せとお手伝い、コーヒーとワッフル付きと言うサービスまで、私も早くに現場に着き、細かい話をして、新木場駅まで出演者2人を迎えに行きまして、小菊姐さんと音の打合せをして、2人を楽屋に案内、それなりに忙しい時間でした。小菊姐さん曰く「流石に材木屋さんの楽屋だけ在って、良い木を使っていますネ」と感心しきりでした。17時過ぎに、お客様に入場頂き、開演30分前にCDによる一番太鼓を流し、我々も心の準備をします。5分前に二番太鼓を入れ、予定より少し遅れて開演、先ずは、前座の三遊亭馬ん長さん「寄合酒」をタップリ25分、中々明るく、軽快な調子で、お客様を温^{あたた}めたててくれました。次に小菊姐さんの粹曲、これは流石に芸歴ン十年のシットリと艶のある高座で、お客様を寄席の世界へと引き入れてくれました。姐さん有難うございます。ここで、お仲入(休憩時間)を約15分、お客様にホッと一息ついて頂き、サア真打ち、三代目橘ノ百圓(どうもスビバセン)の登場です。本人は、それなりに受けたと思っておりますが、出来の良し悪しは、お客様にお任せ致します。終演後、打ち上げまで設けて頂き、誠に有難うございます。3人共深く感謝致しております。

ではここで、私(さい善代表)の落語との係りを話したいと思います。マア、私の両親も芸事が好きで、小唄の出稽古を受けていたほどですから。私の子供の時分には、今は無き、人形町末廣に何度か連れて行って貰ったのを覚えています。そんな訳で、小学生の時には人前で噺しをしていました。特に4年から、6年生までの担任の先生が、お笑いが好きで、良く噺しを聴かせてくれたものです。また中学から高校にかけては、お笑いブームで、各テレビ局でも、漫談、漫才、落語などを取り上げていました。今は、その方達もほとんど亡くなっていますが…。デッ!大学に入学して、各部の新入生募集の時に、落語研究会(略してオチケン)に入った訳です。ここから、私の落語人生が始まるのです。それから直ぐに、先輩が連れて行ってくれた旧鈴木演芸場の楽屋で、当時二ツ目だった、三遊亭扇馬さんと会い、日本大学文理学部落語研究会の演技指導をお願いしたのです。因みに、私の専攻は、商学部経営学科でしたが、文理学部落研入部の^{イキカツ}経緯は、また後にして、先ず、これを切っ掛けに、扇馬さんとのお付き合いが始まった訳です。その年の学部祭に扇馬さんと呼んで、一席お願いしたのですが、その前座を私が務めたのです。

多分「やかん」を演ったと記憶しています。扇馬さんは「南瓜屋」でした。その高座を袖から観て、その上手さに感動したのを、今でも覚えています。高座を終えた扇馬さんが、私に「少し家ウチに通って見ないか!？」とのお誘いを受けた時は、本当に嬉しかったです。私は「親に相談します」と、いかにも学生らしい間抜けな返事をしたのですが、母親は簡単に許してくれました。その1週間後アトから、日暮里に在る6帖1間のアパートに通う事になったのです。扇馬師匠のお宅へ行く3日前に、「お前は、何を習いたいんだ?」との連絡が在り、「たらちね」と「一目上り」と、前座噺2題をお願いしたのですが、「たらちね」を一ツ教えてくれました。この当時はまだ、三偏稽古で、正に真剣な稽古でした。流石に好きな事ですネ、三偏聴くと覚えるのです。無論師匠と私が1対1の対面稽古です。稽古が終わると、毎回!酒を飲みながらの芸談、雑談、たまには猥談、お陰様で酒も神経も強くなりました、とにかく18年生きて来て、聞いた事の無い話題が山盛ですから、加速度的に落語にのめり込んでいきます。約半月ほどで覚え、師匠の前で演じて、何ヶ処かの駄目出しを受け、その噺は終わります。次が「墓ガマの油」だったのですが、扇馬師匠から「これは、正蔵師匠(八代目)から着けて貰った噺だから、大事に演れ!」と言われましたが、それぞれの派によって言い回しも、演じ方も違うのです。

と、ここまで書いた処で、今回はこれにて終了、これから、どう話が展開して行きますか!?! お楽しみに ※お後アトがよろしいようで

「落語豆知識」

※「お後アトがよろしいようで」

この言葉は、噺家ハナシカ(落語家)が、寄席等の高座で口にしますが、主に自分の次の演者の準備が整っている事を表すもので、次の者が表れていない場合、羽織を楽屋の袖に投げて、演者が到着した時に前座さんが、この羽織を引いてその旨を伝え、そこで「お後アトがよろしいようで」となります。



「新木場寄席」トリの筆者(三代目 橘ノ百圓)